

HEISEI - TOKYO
Snap Shot Love

11人の写真家の物語。新たな時代、令和へ

HEISEI - TOKYO
Snap Shot Love

平成・東京・スナップ LOVE



<東京ストラット>より

有元伸也 ARIMOTO Shinya

東京で暮らして二十余年、親しい友人も、愛する恋人も、守るべき家族も持たない僕にとって、何かしらの記念日、盆や正月などの目出度い時節もいつもの一日と変わりはなく、むしろ普段のルーティンを乱されることに疎ましささら感じている。しかし思い起こせば、平成元年に高校を卒業したのちに写真と出会い、今日に至るまで全ての作品は平成年間に撮られたもので、僕の写真人生は平成と共にあったとも言える。その事実を平成一令和の時節と共に、記憶に留めてくれることになった本展企画に感謝いたします。

過ぎた時代を振り返ってみても思い出すのは情けない事ばかりだし、恥にまみれた人生だけど、令和時代もせいぜい胸張っていきましょう！

令和元日 有元伸也

有元伸也

1971(昭和46)年、大阪府生まれ。1994(平成6)年、ビジュアルアーツ専門学校大阪卒業。1998(平成10)年、「西藏より肖像」により第35回太陽賞受賞。2008(平成20)年、TOTEM POLE PHOTO GALLERYを設立。2017(平成29)年、「TOKYO CIRCULATION」により第26回林忠彦賞、日本写真協会賞作家賞受賞。チベット



Baji Park, Tokyo 2002

ERIC

この作品を撮影していた頃、まだ、日本の文化に馴染んでいなかった。

おにぎり、サンドウィッチ、お寿司、蕎麦、慣れるまで時間がかかった。

写真屋でアルバイト、撮影の仕事に追われていた日々だったが、

この作品を撮影していた頃、写真に無我夢中の自分がいた。

素直に撮影出来た頃で、誰に何を言われようが、何も気にしなかった。

ドキドキを味わえる距離で撮影することが好きで、

日常では味わうことの出来ないこのスリルを極めると、アドレナリンが絶えず体内から湧いてくる。

その興奮にプラスαした日中の光とのシンクロから生まれる鮮やかな色の、

いかにも合成したかのような絵面が好きだ。

平成ありがとう。そして、「GOOD LUCK 令和」。

ERIC

1976(昭和51)年、香港生まれ。1997(平成9)年、来日。2002(平成14)年、「一日と永遠」で第19回「ひとつぼ展」グランプリ受賞。2004(平成16)年、写真集『everywhere』で第2回ビジュアルアーツフォトアワード大賞受賞。2009(平成21)年、写真集『中国好運|GOOD LUCK CHINA』で第9回さがみはら写真新人奨励賞受賞。



2017年2月 原宿

大西 正 ONISHI Tadashi

「平成」

昭和天皇が崩御したとき、学校が休みになって友達の家で麻雀をしていたことがおぼろげに記憶にある。それが平成のはじまりだった。平成がどういう時代だったかは自分にとっては日常すぎてよく分からぬ。普通の日々だった。写真についていえば写ルンですや、コンパクトカメラで身の周りを撮っていて、ケータイにカメラがついてからはほぼそれで撮っていたし、カメラ好きの親父に一眼レフをもらってもなんとなく面倒くさくてあまり使わなかった。子供が生まれてから、ようやくデジカメを買ったくらいだった。今は朝起きてから夜寝るまで手の届くところにカメラがあって、歯磨きをするのと同じくらい日常的に写真を撮るようになった。そう考えてみると、写真に対する認識が変わったのが自分にとっての平成なのかもしれない。人生の後半の入口で元号が変わり、これから平成がどういう時代だったのか、ようやく振り返ることが出来るのだと思う。いつか写真を見返して鮮明に記憶を呼び戻すときに、ああ撮っていてよかったなと思うんだろう。

大西 正

1973(昭和48)年、東京都生まれ。国内外で東京スナップの展示を行う。2017(平成29)年ストリートフォトZine・VoidTokyo立ち上げより参加。スナップ写真を撮影場所である路上に投影する“路像プロジェクト”主催。



葛飾区、矢切の渡し 1992, <Wonderland>より

大西 みつぐ ONISHI Mitsugu

「昭和」が終わった日は浅草にいた。「平成」は沈鬱なイメージとともにはじまっていたが、まだ浅草もそのほかの下町も特別なにかが変わったという実感もなく、あいかわらず風采のあがらない愛すべき町風景があった。しかし、確実にバブル崩壊の余波は下町にも忍び込んできていて、忽然と古い工場が消えていたり、川沿いの新しい「街」は多摩ニュータウンにも匹敵するほどの規模で動きはじめていた。60年代末から続くモノクロの<Wonderland>シリーズは、実のところカラーによる作品制作に飲み込まれていきそうな危うさを自分で感じていた。時代としっかり寄り添う意味ではカラーを主力に切り替えていくことにしたのだが、どうしてもモノクロを封印する気にはなれず、瀬戸際の風景をボチボチ拾い集めていた。今見ると結果として懐かしい趣もあるが、本質的に下町は東京ローカルであって、そこに町と人の意思が連綿として続いているのだと思う。

大西 みつぐ

1952(昭和27)年、東京都深川生まれ。東京綜合写真専門学校卒業。1970年代より東京下町や湾岸の人と風景、日本の懐かしい町を撮り続けている。1985(昭和60)年、「河口の町」で第22回太陽賞、1993(平成5)年、写真集『遠い夏』ほかにより第18回木村伊兵衛写真賞、江戸川区文化奨励賞、2017(平成29)年、日本写真協会賞作家賞受賞。



©TOKYO

オカダキサラ OKADA Kisara

平成は、私の人生そのものです。

私の記憶の96.6%は平成からできています。生まれも育ちも東京ではあるものの、

「昔はこんなだった」と語れるものは、まだありません。

生産と破壊が短いサイクルで繰り返され、目まぐるしく風景が変わる都市。

私にとってはそれが日常で、去っていった一つ一つのものごとについて、

特別な感慨を持たせてくれる間もありません。

もし私が「昔はね」と、話せる日が来るとしたら、それは東京が停滞したときなのかもしれません。

オカダキサラ

1988(昭和63)年、東京都生まれ。2010(平成22)年、武蔵野美術大学映像科卒業。2012(平成24)年、東京綜合写真専門学校卒業。2011(平成23)年、一年の期間限定で桃園画廊を運営。第4回写真「1_WALL」ファイナリスト。2016(平成28)年、コニカミノルタフォト・プレミオ入選。



池袋サンシャイン60 特別展望台より、1999 <Tokyo Candy Box>より

尾仲浩二 ONAKA Koji

<Tokyo Candy Box>の作品のほとんどは1999(平成11)年の撮影です。その年の春から夏は青空と雲がとても美しく、フィルムを白黒からネガカラーに変えたばかりの僕はプリントする度にカラーフィルムの持つ力に驚き、新しい何かが始まる予感にわくわくしながら毎日朝からカメラを手に街へとでかけていきました。街では世纪末と騒がれていて、僕も20世纪の東京を残しておきたいとの思いが少しあったのかもしれません、それよりもカラー写真の面白さに夢中になっていたのです。東京は絶えず変化を続けている都市です。近年は古い街が根こそぎ壊され大きなビルが次々と建ち、昔の街の記憶のカケラも残っていない。それがいいのか悪いのかはともかく、写真を撮る僕らには面白い街であることは間違ひありません。

尾仲浩二

1960(昭和35)年、福岡県直方市生まれ。1982(昭和57)年、東京写真専門学校(現・東京ビジュアルアーツ)卒業。イメージショップCAMPに参加[1984(昭和59)年、解散]。1988(昭和63)年、自主ギャラリー・街道を西新宿に開設[1992(平成4)年、閉鎖]。2016(平成28)年、中野で再開]。1992(平成4)年、写真集『背高あわだち草』で写真の会賞受賞。2002(平成14)年、東川賞新人作家賞受賞。2006(平成18)年、日本写真協会賞新人賞受賞。



TOKYO NOBODY Yoyogi, Shibuya-ku, May 2000

中野正貴 NAKANO Masataka

「TOKYO NOBODY」

「無人の東京」シリーズを撮り始めたのは1990(平成2)年の1月、時は正にバブル崩壊前夜といったタイミングであった。昭和の高度経済成長の快進撃を受けて始まった平成であるが、いきなり出鼻をくじかれる試練のスタートとなった。

「大都市東京から人も車もいなくなり、空っぽの空間だけが取り残された街はいったいどんな世界なのだろうか?」という懷疑的な妄想が生まれるような不穏な気配が昭和の終わり頃には既に漂っていたのだが…。平成は天災人災の両方に見舞われた受難の時代だったが、インターネットの普及により急速に世界と繋がった新時代の幕開けの時でもあり、近未来が具現化し始めたという印象も強い。そんな状況下でも東京は相変わらず走り続け回転が止まる事は無かった。

東京は多種多様な文化と欲望が絡み合っているのでなかなか実態が捉えられないが、都市の休息日に垣間見せる静かな表情の中にも東京らしさが潜んでいる。

中野正貴

1955(昭和30)年、福岡県生まれ。1956(昭和31)年より東京在住。1979(昭和54)年、武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン科卒業。写真家・秋元茂氏に師事。1980(昭和55)年以後、フリーランス・フォトグラファーとして、雑誌表紙撮影や広告撮影を手がける。2001(平成13)年、写真集『TOKYO NOBODY』により日本写真協会賞新人賞受賞。2005(平成17)年、写真集『東京窓景』により第30回木村伊兵衛写真賞受賞。2008(平成20)年、写真集『MY LOST AMERICA』によりさがみはら写真賞2008プロの部最高賞受賞。2019(令和元)年11月、東京都写真美術館にて写真展「東京」開催予定。

有元伸也

ERIC

大西 正

大西みつぐ

オカダキサラ

尾仲浩二

中野正貴

中藤毅彦

ハービー・山口

原 美樹子

元田敬三

FUJIFILM SQUARE 企画写真展
11人の写真家の物語。新たな時代、令和へ
「平成・東京・スナップLOVE」
Heisei - Tokyo - Snap Shot Love

主 催 富士フイルム株式会社
企 画 コンタクト

東京展:フジフィルム スクエア
2019年6月21日(金)～2019年7月10日(水)
大阪展:富士フイルムフォトサロン 大阪
2019年7月26日(金)～2019年8月7日(水)

FUJIFILM SQUARE

<http://fujifilmsquare.jp/>

デザイン 長尾敦子(Book Photo PRESS)
印 刷 株式会社東京印書館
発 行 富士フイルム株式会社

※本印刷物の一部あるいは全部を複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
© 2019 富士フイルム株式会社



11人の写真家の物語。新たな時代、令和へ

HEISEI - TOKYO Snap Shot Love

平成・東京・スナップ LOVE

有元伸也／ERIC／大西正／大西みつぐ

オカダキサラ／尾仲浩二／中野正貴／中藤毅彦

ハービー・山口／原美樹子／元田敬三（敬称略）

2019.7.26 金 - 8.7 水

会期中無休・入場無料 10:00—19:00(入館は18:50まで)

富士フィルムフォトサロン 東京 2019.6.21 金 - 7.10 水

主催：富士フィルム株式会社 企画：コンタクト

photo: 尾仲浩二 Tokyo Candy Box No.00, 1999 ©Koji Onaka

FUJIFILM

HEISEI - TOKYO Snap shot Love

11人の写真家の物語。新たな時代、令和へ
平成・東京・スナップLOVE

2019.7.26 - 8.7 会期中無休・入場無料
水 10:00-19:00(入館は18:50まで)

ポートフォリオレビュー&トークイベント開催!



出展写真家が作品を講評。最終選考で優秀と評価された方は写真展を2020年春頃、
富士フィルムフォトサロン 大阪 ホワイエで開催。

詳細・お申込方法・東京イベント等は、ウェブサイトをご覧ください。

<https://fm.fujifilm.jp/form/pub/sen/square1906talk>

[同時開催] 令和・東京・チェキプロジェクト

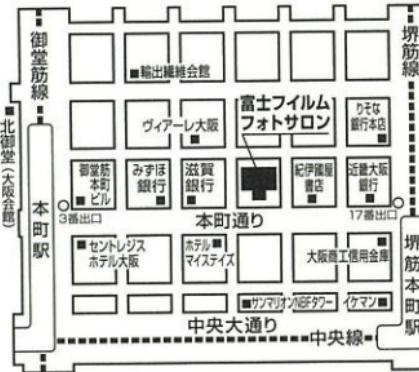
FUJIFILM

富士フィルムフォトサロン 大阪
〒541-0053大阪市中央区本町2-5-7
メッツライフ本町スクエア(旧大阪丸紅ビル)1F
TEL.06(6205)8000電話受付時間 [平日10:00~18:00]

地下鉄 御堂筋線「本町」駅下車 3番出口より徒歩約5分
地下鉄 堀筋線「堀筋本町」駅下車 17番出口より徒歩約3分

入場無料 ※祝花は堅くお断り申し上げます。

展示内容の詳細は、富士フィルムホームページにて、ご案内しています。
<http://www.fujifilm.co.jp/photosalon/>





11人の写真家の物語。新たな時代、令和へ

HEISEI - TOKYO Snap Shot Love

平成・東京・スナップ LOVE

有元伸也／ERIC／大西正／大西みつぐ
オカダキサラ／尾仲浩二／中野正貴／中藤毅彦
ハービー・山口／原美樹子／元田敬三（敬称略）

2019.7.26 金 - 8.7 水

会期中無休・入場無料 10:00—19:00(入館は18:50まで)

富士フィルムフォトサロン 東京 2019.6.21金-7.10水

HEISEI - TOKYO Snap Shot Love

2019年5月、令和が幕を開けました。21世紀へと世纪の転換期を経験した平成は、写真にとっても未曾有の激流に身をさらされた時代でもありました。人と街が織りなす瞬間のドラマが限りなく生まれる東京は、写真家にとって尽きないストーリーに満ちた劇場のような場所です。

「平成・東京・スナップ LOVE」展では、“スナップ”を愛してやまない11人の

写真家たちが、“平成”の“東京”を舞台に生み出した写真作品、約100点を一堂に展示します。

写真家の心が大きく動いた瞬間を写しとる“スナップ”は、見るもの日常にも新しい扉を開いてくれます。“スナップ”的魅力を感じていただき、新たな時代、令和へ思いをはせる写真展です。



大西みつぐ

江戸川区南小岩、<Wonderland>より
©Mitsugu Onishi



尾仲浩二

Tokyo Candy Box No.00, 1999 ©Koji Onaka



大西 正

2017年2月 原宿 ©Tadashi Onishi



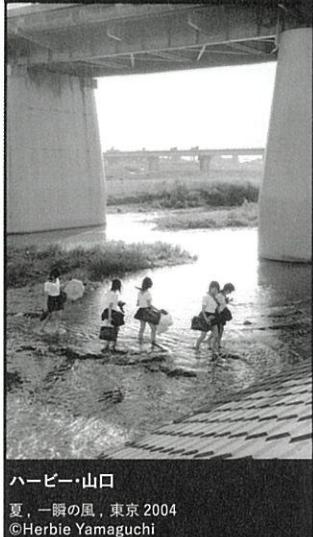
オカダキサラ

©TOKYO ©Kisara Okada



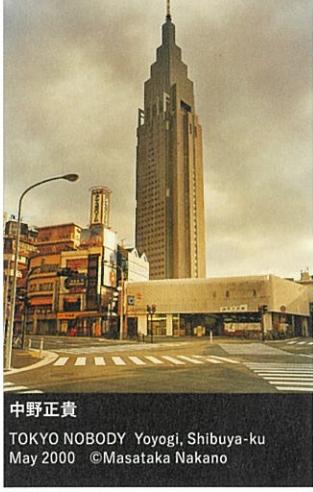
原 美樹子

Untitled, 1996 ©Mikiko Hara



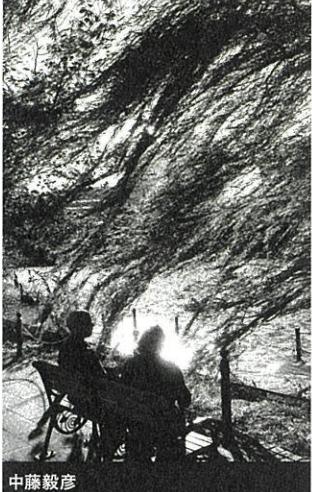
ハービー・山口

夏、一瞬の風、東京 2004
©Herbie Yamaguchi



中野正貴

TOKYO NOBODY Yoyogi, Shibuya-ku
May 2000 ©Masataka Nakano



中藤毅彦

シリーズ<White Noise>より、上野不忍池
©Takehiko Nakafuji



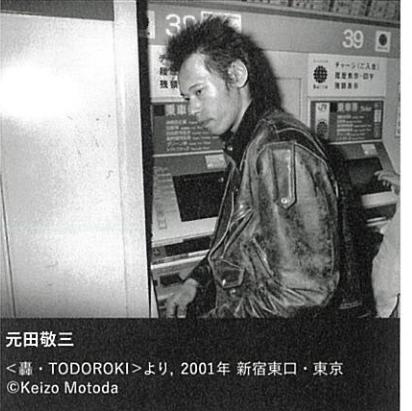
有元伸也

東京ストラット ©Shinya Arimoto



ERIC

Baji Park, Tokyo 2002 ©ERIC



元田敬三

<轟・TODOROKI>より、2001年 新宿東口・東京
©Keizo Motoda

ポートフォリオレビュー & トークイベント開催!

プロを目指す方、作品づくりに取り組む方などの作品を展出写真家が、少人数制で講評いたします。一次選考後、公開の最終選考会を行います。最終選考会終了後、展出写真家がスナップを語るトークイベントを開催します。最終選考会で優秀と評価された方の写真展を2020年春頃、富士フィルムフォトサロン 大阪 ホワイエで行います。

詳細・お申込方法・東京イベント等は、ウェブサイトをご覧ください。

<https://fm.fujifilm.jp/form/pub/sen/square1906talk>



日程 7月27日(土)

レビュアー&出演者 大西みつぐ、元田敬三

1. ポートフォリオレビュー 一次選考(非公開)

※ 1は応募・参加ともに無料、事前申込制(応募多数の際は抽選)、ウェブ申込

2. 公開最終選考会

3. トークイベント

※ 2と3は見学・参加ともに無料、事前申込制(先着順)、ウェブ・会場・お電話で申込

FUJIFILM

富士フィルムフォトサロン 大阪

〒541-0053 大阪市中央区本町2-5-7

メットライフ本町スクエア(旧大阪丸紅ビル)1F

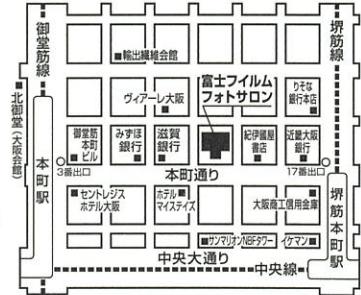
TEL.06(6205) 8000 電話受付時間 [平日10:00~18:00]

地下鉄 御堂筋線「本町」駅下車 3番出口より徒歩約5分
地下鉄 堀筋線「堺筋本町」駅下車 17番出口より徒歩約3分

入場無料 ※祝花は堅くお断り申し上げます。

展示内容の詳細は、富士フィルムホームページにて、ご案内しています。

<http://www.fujifilm.co.jp/photosalon/>



[同時開催] 令和・東京・チェックプロジェクト

5月1日の令和改元以降に、展出写真家がチェックで撮影した写真を写真展会場で上映いたします。